地理の学び直しを踏まえた効果的な世界史の授業

千葉県立　○○○○　高等学校　○○　○○（世界史）

１　はじめに

（１）　○○○○高等学校について

本校は，平成 23 年 4 月 1 日，○○○○高等学校と○○○○高等学校が統合して開校し，今年で 4 年目となる。統合前は，ともに小規模校であったが，本年度は 1 学年 8 学級（普通科 7 学級・福祉教養科 1 学級）の学校規模となった。福祉教養科は県内唯一の福祉の専門学科として平成 5 年に○○○○高校に設置され，生徒は介護福祉士国家試験の受験資格取得を目指して，7 時間授業・校外実習・休業中の特別授業と日々学習に取り組んでいる。国家試験の合格率は 89.5%（平成 25 年度）で全国平均 64.6%を大きく上回っている。また平成 25 年度から福祉教育拠点校となり，普通科でも 1 年次，福祉科目（社会福祉基礎・2 単位）を全員に履修させ，福祉に対する正しい知識や姿勢を身につけさせている。3 年次には福祉コースを設置し，認定試験を通過すれば普通科でも介護職員初任者検定修了者（旧ホームヘルパー2 級相当）の取得が可能となっている。統合前は両校ともに生徒指導の面では大きな問題を抱えていた時期もあったが，現在は落ち着きも取り戻し，授業規律も確立してしっかり取り組もうとする生徒も増えてきている。しかし，本校は基礎的な知識や技能･基本的学習習慣が身についていない生徒も多く，基礎の定着を指導の基本としている。

（２）　○○○○高等学校の取組み

新学習指導要領の総則でも，基礎学力や学び直しについて，「…基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ…（総則第１款１）」とあり，また「…義務教育段階での学習内容の確実な定着を図るようにすること（総則第５款３⑶）」とし，「…義務教育段階での学習内容の確実な定着を図るための学習機会を設ける…（総則第５款３⑶）」ことなど，定着を図るための指導を新たに示している。そのため統合に向けて「学習指導や生徒指導を充実させ，一人一人の進路希望を実現できる学校」として，基礎的・基本的な学力を保障するため，各教科で「学び直し」の授業を検討した。検討の結果，教科により「学び直し」の授業を導入することとした。

２　主題の設定理由

（１）　学び直しの授業の導入

各教科で検討を進める際には，現状をしっかりと把握し，最終的に身につけさせたいものも確認した。本校生徒の現状について確認すると，地理・歴史に関する知識や技能は右のとおりである。思考力・判断力・表現力のもととなる基礎的・基本的な知識や技能が十分に身についているとは言い難い状況である。

＜生徒の現状＞
地理
●地図帳から地形，県，都市などを探せない。
世界史
●各文化圏の特色・位置関係が把握できない。
●ヨーロッパ文化圏等では人名･地名の区別ができない。
●常用漢字以外は表記しにくい。
●世紀，年代を理解できず日本史との照合も難しい。

平成 25 年度以降の入学者の教育課程（普通科）
1 年　　地理 A（3 単位）**1 単位は学び直し。1 クラス 2 分割**
2 年　　世界史 A（3 単位）
3 年必修　現代社会（3 単位）
　選択 1　世界史 B・日本史 B・地理 B（3 単位）
　選択 2　政治・経済，地域研究（学校設定科目）（2 単位）

また学び順を考慮した本校地歴公民科の教育課程では，地理の学習内容を確かなものと

して定着させ，世界史などへとつなげていくことが重要である。

以上を踏まえて検討した結果，現状を改善し基礎的・基本的な知識や技能を保障するため，地理の授業で「学び直しの時間」の設定を決めた。3 単位のうち 1 単位（1 時間）はクラス 2 分割による少人数授業で，「国家」「都市」「地形」「都道府県」という基礎・基本を集中的に学ぶ，地誌・地図の理解に特化した授業の実施である。学んだ内容は世界史など他の授業でも活用し，科目間での連携を重視する。

（２）　主題の設定

以上，本校生徒の学力と現状，それに対する学校・地歴公民科としての取組みを踏まえつつ，主題を設定した。地理の学び直しの授業で学んだことを世界史の授業で上手に活用することによって，世界史の内容の理解がすすむのではないかと考えた。さらに国家や都市を知っていることで生徒はその地域を具体的にイメージすることが出来るようになり，それが世界史の学習に対しても意欲を高めることになるのではないかと期待できる。

３　研究の方法

（１）　前段−1 年生地理 A の学び直しの授業

「学び直し」の地理 A の 1 時間の年間指導計画の概略は右の通りである。すべて独自プリントを作成し，地図帳・色鉛筆を利用して反復学習する。主な展開は，

地図帳で確認→プリントに記入・作業→確認問題を実施

という流れである。確認問題は到達点を明示し，到達しない場合は課題か再度問題を実施する方法で定着を図っている。また同内容のものを定期考査でも出題し，反復の度合いを高めて更なる定着を目指している。そのため，各担当者間（4 名〜5 名）で適宜，連絡・報告をおこない，進度・定着度を確認している。確認問題の作成や考査等での出題内容・形式等も検討している。

1 学期
・大陸・海洋の名称と位置
・東〜南アジアの国家と地形
2 学期
・西アジアの国家と地形
・中央（内陸）アジアの国家と地形
・アフリカの国家と地形
・ヨーロッパの国家と地形
・アメリカの国家と地形
・オセアニアの国家と地形
3 学期
・日本の都道府県と特色

（２）　世界史における地理の学び直しの活用

ア　世界史の教科書における地図の取扱い

「世界史を理解するには，地理の知識が不可欠」とはよく言われることである。では，地理の知識を活用した世界史の授業とはどのようなものか，この問いは非常に難しいものといえる。現在採用されている世界史の教科書には多数の地図が掲載されている。最近ではその教科書の地図に直接作業を行うことによって理解を深めさせるような地図も多い。明らかに世界史でも地図を活用して理解を深めることが求められているようである。

教科書名	出版社	総頁数	地図の頁	
世界史A	第一学習社	232	98	**42.2%**
世界史A　最新版	清水書院	211	102	**48.3%**
詳説　世界史B	山川出版社	418	97	**23.2%**
世界史B	実教出版	427	129	**30.2%**
世界史B	東京書籍	420	133	**31.7%**

世界史の教科書で地図の記載されているページを比較してみる。平成 26 年度本校で使用している世界史の教科書（第一学習社）における地図の掲載ページ数は右の通りである（ページ数のあるページに載っている場合とする。複数のページにまたがる場合は 1 ページとし，年表及び目次は除いた）。世界史の教科書での地図の取扱いは，意外と高いものなのではないだろうか。当然地理での地

図は統計図も多数含まれている。グラフや図を主とするような地図も多数あり，それを除けば掲載に大きな差はないように思われる（本校で使用している「地理 A」（帝国書院）は 127 ページ／208 ページ（61%）である)。また世界史の教科書は表紙及び裏表紙の裏はいずれも地図（地形および地勢・国家）となっているものが多い。

イ　諸地域を学習する際の復習・確認

昨年度学習した内容の確認・復習を，諸地域の歴史を学習する導入とする。昨年度の内容とほぼ同内容とする。地理的な知識をしっかりと身につけ確認しておくことで，世界史の理解や意欲的な取組みにつなげていく。留意する点は，理解は低いと考えられるため，各自しっかりと地域を確認・意識させることである。学習していく地域への関心を高め，歴史の理解も深める。

新しい地域の学習を進める前の時間の最後に，テスト形式で復習を実施（机上にはプリントのみとする。何も見ない。）し，短時間で回収する。プリントは回収するが，その後地図帳でその地域の国家と地形を確認させる。採点して返却し，各自で地図帳を見ながら訂正させる。これを各地域で繰り返し，定期考査でも出題することで反復の度合いを高め，知識の定着をはかる。

今回は右の 4 つの単元で，授業を実践した。世界史の学習内容として，地理的な知識が求められ，しっかりとした地理的な知識が理解を深めると期待できる単元である。

⑴世界史へのいざない（世界史 A）
⑵−1 諸地域世界の形成（世界史 B）
　イ　南アジア・東南アジア世界
⑵−2 世界の一体化と日本（世界史 A）
　ア　ユーラシアの諸文明（東南アジア）
⑶世界の一体化と日本（世界史 A）
　ア　ユーラシアの諸文明（ヨーロッパ）
⑷諸地域世界の結合と変容（世界史 B）
　イ　ヨーロッパの拡大と大西洋世界

4　授業実践

（１）人間と自然環境（平成 26 年度世界史 A）

ア　学習指導要領と解説

今回の学習指導要領の改訂で新設された大項目で，「…世界史学習の基本的技能に触れさせるとともに，地理と歴史への関心を高め，世界史学習の意義に気付かせる（世界史 A　２内容⑴)」導入としての学習である。学習の方法も「歴史の舞台としての自然環境について，…地図や写真などを読み取る（世界史 A　２内容⑴ア)」ことで基本的技能に触れさせ，今までの学習内容や経験を踏まえている。また学習指導要領解説では「…地理と歴史，日本の歴史と世界の歴史が密接に結びついている」ことに気付かせることが求められている。

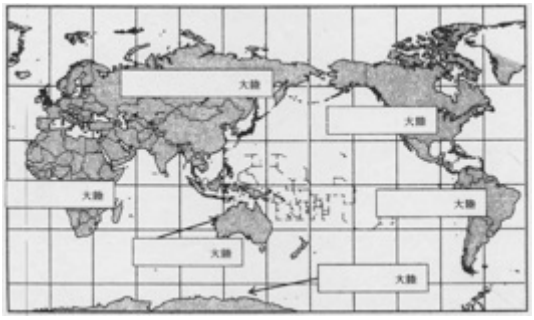
イ　授業展開

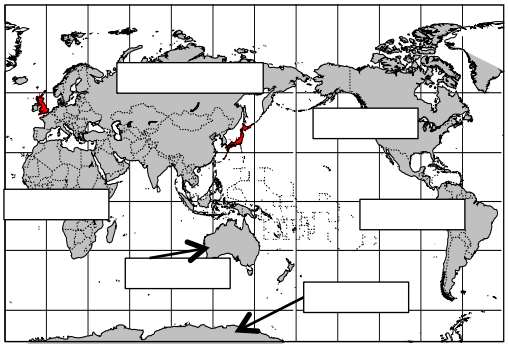
（ア）導入＝復習の実施

昨年度の学習内容を活用しながら学習を進めていくことをより強く実感できるように，世界史の第１回目の授業時のオリエンテーションと同時に（地理的な知識の必要性も説明)，昨年度学習した内容である「大陸」と「海洋」について復習をおこなう。今回はテスト形式ではなく，あくまでも「確認」として実施する。

次ページの左側が１年生４月に学習した内容であり，右側は２年生４月の学習内容である。同じものを使用しているが，その理解は完全ではない。ほとんどの生徒は大陸に関しては問題がないが，中には「アフリカ大陸」と「南アメリカ大陸」を混同する生徒も僅かだが存在

する。また海洋に関しては，太平洋の「大平」の間違い，インド洋の失念が見受けられる。同様に「四大文明」についても概略を確認しておく。四大文明に関する理解度は全体的に高いようである。





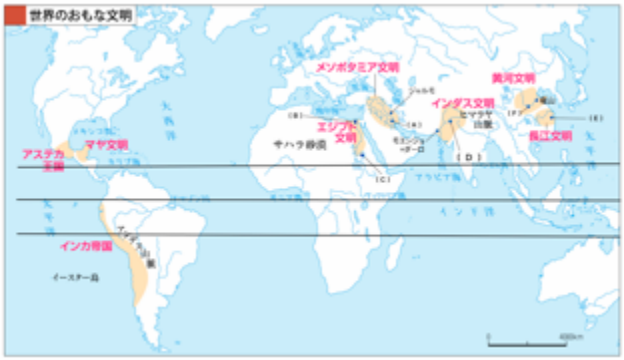
（イ）展開

授業のねらいとしては，次の 3 点である。

①四大文明の発生地域の確認
②四大文明の地理的共通点を考察
③自然環境と人類・歴史の関連性の理解

①四大文明の発生地域の確認では，地図帳を使用する。地図帳を使用しながら，河川と次の都市・遺跡を確認しておく。

ウル（メソポタミア文明）
ギーザ（エジプト文明）
テーベ（エジプト文明）
ハラッパー（インダス文明）
河姆渡（長江文明）
仰韶（黄河文明）



確認後は，プリントの地図を使用して理解を深める。

・河川をなぞる
・確認した都市・遺跡を記入
・赤道の確認

赤道の位置に関しては，約３分の１の生徒が不正解である。正解している生徒でも自信を持って答える生徒は多くはない。赤道を確認させるのは，共通点を考察させるためのヒントである。

つづいて②四大文明の地理的共通点を考察させる。赤道を確認することで「北半球」という共通項は掴みやすい。状況を見て各都市の緯度に注目させる。

ウル（北緯３０度）
ギーザ（北緯３０度）
テーベ（北緯２５度）
ハラッパー（北緯３０度）
河姆渡（北緯３０度）
仰韶（北緯３５度）

共通点としては，中緯度（亜熱帯高圧帯），乾燥帯に属する，大河流域に平野が形成されているなどである。授業後に実施したアンケートの結果は次の通りである。

＜Q　エジプト文明・メソポタミア文明・インダス文明・中国（黄河・長江）文明に共通することは何だと思いますか。＞
赤道より北にある／川に近い／遺跡がある場所が直線上にある／北の方に密集している／北緯３０°～３５°辺りにある／多分，物を運びやすいから／遺跡が全部横並び，いちれつになっている。

残念ながら気候，平野の存在に関しては気付きがない。河川による平野の形成とその平野への人口の集中など重要な要件については言及したい。川が近いことが何を意味するのかまでしっかり考えさせたい。

その後，③自然環境と人類・歴史の関連性の理解として河川を利用する灌漑の実施による農耕の発展について学ぶ。地図帳の利用や昨年度の学び直しの授業での知識の活用に重点を置いて展開するが，生徒の反応は，概ね良好で，主体的に臨む姿も多く見受けられる。

（ウ）まとめ

授業後に実施したアンケートの結果は次の通りである。

＜Q　今日の感想・思い＞
文明が起きる所にも理由がある／共通点が意外とあったからビックリしたし，すごいと思った／赤道より北側は人がすみやすいんだと思った／河で平野が形成され，住みやすくなっていた／文明と環境は関係していることがわかった／環境をしらないと歴史を学べない／去年習った環境とか気候が世界史でも必要だと知って去年の勉強も思い出さないとなと思いました／あまり文明とかに興味なかったけど先生の話とか聞いてとてもおもしろいと感じました。

学習指導要領のねらいも含めて概ね目的は達成できているかと思われる。地理的な要因が歴史に与える影響を少しでも理解できたのではないだろうか。事前に地理的な知識を与える，または活用しながら学習することが，理解を深めているようである。だが正直なところ，地図帳の確認，プリントでの作業及び考察は，地理的な技能や知識を「上手に活用」とは言えず，何とも辿々しく覚束ない生徒も多かった。継続した指導はやはり必要である。

（２）東南アジアの学習（平成 25 年度世界史 B 及び平成 26 年度世界史 A）

ア　学習指導要領と解説

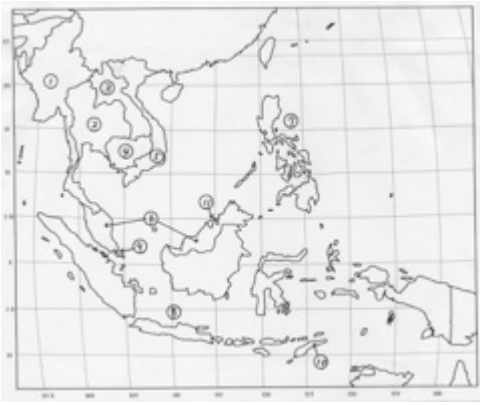
多くの高校生が東南アジアに対する知識や理解を欠いているという指摘は，恐らく正しいと思う。場合によっては認識すらしていないのではないかと少々不安になることもある。しかし，近年日本との結びつきをより強めている地域であり，残念ながらニュース等で名前を聞くことが増えてしまった地域でもある。学習指導要領では世界史 A・B ともに「自然環境，生活，宗教などに着目させながら（世界史 A　２内容⑵ア）…」，「南アジアと東南アジアの地理的特質…（世界史 B　２内容⑵イ）」と地理的な知識をもとに概観・把握させることになっている。学習指導要領解説でも「…半島部と島嶼部からなり，南アジアと東アジアの中間地帯に位置し…（世界史 B　２内容とその取扱い⑵イ）」と自然環境の把握を求めている。どこにあるのか，どんな国があるのか，どんな地形なのかをしっかりと身につけて，その歴史・文化を理解させたい。

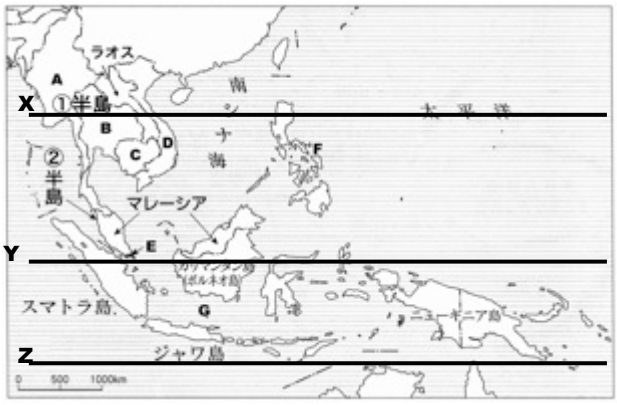
イ　授業展開

（ア）導入＝復習の実施

前時の最後にテスト形式（プリント以外机上には何も出さない。何も見ない）で，東南アジアの国々を確認させる。昨年学習した内容であることを強調し取り組む意欲を高める。

次のページ左側が１年生５月に学習した内容，右側が今回実施する復習プリントである。プリントはすぐに回収する。回収後，地図帳を使用して確認させる。多くの生徒が地図帳を注視する瞬間でもあり，興味を持って臨む生徒も多い。採点は教員が行う。





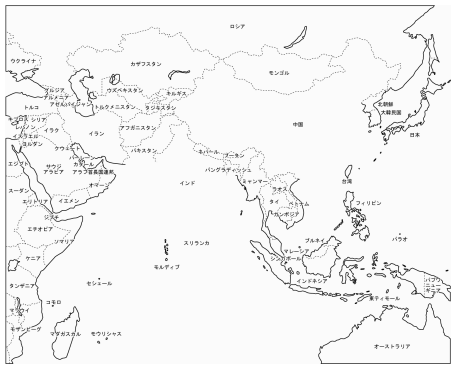
テスト形式で実施すると当然ながら結果は思わしくなく,全体的に正答率は低い。

A	B	C	D	E	F	G
ミャンマー	タイ	カンボジア	ベトナム	シンガポール	フィリピン	インドネシア
10.2%	10.8%	11.4%	14.8%	15.3%	38.1%	24.4%

この状態で東南アジアの歴史を学んだとしても，効果的ではないと思われる。知識を定着させるために，前時の確認・復習プリントで地図帳を使用し，答え合わせを行う。生徒は，返されたプリントを見て様々な反応を示すが，概ねよく取り組んでいる。前時に引き続き，地図帳を利用することで，東南アジアに対する生徒の関心を高めることができる。

（イ）展開

国名の確認後は東南アジアへの理解を深め,「南アジアと東アジアの中間地帯に位置」することを強く意識させるために，白地図を作成させてみる（イメージマップと同様)。インドと中国を抜いた白地図を使用し，東南アジアの地理的特徴を抑えさせるようにした。



a　白地図（東南アジアの国名は抜く）

南アジア（インド）と東アジア（中国）の中間地帯であることを理解しておいた方が,

・インドシナ半島とよばれる。
・インドの文化と中国の文化の影響が強い。
・島嶼を中心に古くから季節風を利用した貿易により，島々を結ぶ交易路（「海の道」）が発達したこと。

など，特徴を理解しやすいと考える。しかし，実際には生徒は正しい知識をもって地図を完成させるのは非常に難しい。

b　生徒の白地図

【インドしか描けないもの】　【中国しか描けないもの】　【比較的正確なもの】

「比較的正確なもの」はごく僅か（10%程度）で，その大半は「何も描けないもの」（50%を越える）である。再び地図帳を利用し，東南アジアの周囲に気を配らせながら白地図を完成させる。興味や関心をもって臨む生徒が多い。

・半島部…「インドシナ」半島
　大河と平野
　モンスーンの影響
　：西部…インドの影響，仏教の伝来
　　アンコールワット
　：東部…中国の影響
　　儒教・漢字の伝来
・島嶼部…海上交通の要所
　仏教・イスラームの伝来
　ボロブドゥール
・西欧諸国の進出
　特産品の香辛料を求めて西欧諸国が来航。植民地化。

c　東南アジアの歴史

国名を確認し，地域・位置を把握した後で東南アジアの歴史を，今までの地理の確認を踏まえて学習する。内容としては右の通り基本的な内容である。

（ウ）まとめ

学習が終了した後に，アンケートを実施し，地理的な特徴・文化的な特徴をどれだけ理解しているか確認した。残念ながら記述できたのはわずかではあるが，ねらいや目的をつかめている生徒が少なからずいるようである。

＜Q　東南アジアの特質を説明してみましょう＞
気温が高いところが多い／季節風が吹く／インドや中国から文化が入ってきている国がある／ベトナム，フィリピン，ミャンマーなどがある／大陸と島に別れている／インドシナ半島／中国とインドを結ぶ「海の道」が発達している／マリン＝ロード／赤道直下の国がある／インドと中国の間にある地域／有名な世界遺産（アンコール=ワット，ボロブドゥール）がある／インドと中国の性質を持っている／お茶の産地がある／香辛料を求めにきたヨーロッパ諸国と貿易していた。

考査前にプリントを再度確認，出題を連絡する。同じ地図を使用して解答させる。あるクラスの国名の正答率は次のように変化した。復習の時より正答率は上昇している。生徒の中の「理解したい」という意欲・取組みの結果としたい。半島部の諸国，島嶼部のインドネシアの正答率は大きく伸びている。インドネシアに関しては「海の道（マリン＝ロード）」に関する理解が高かったのではないかと思われる。また教え込む，覚えさせる，そして繰り返すことにより定着をはかれるように思う。

国名	ミャンマー	タイ	カンボジア	ベトナム	シンガポール	フィリピン	インドネシア
復習	8.3%	11.1%	5.6%	5.6%	13.9%	41.7%	33.3%
考査	45.9%	45.9%	43.2%	40.5%	54.1%	59.5%	67.6%

（３）フランク王国とヴェルダン・メルセン条約（平成 26 年度世界史 A）

ア　学習指導要領と解説

フランク王国とその分裂を示す地図が載っていない世界史の教科書は，ほとんどないのではないかと思われる。本校の「高等学校　世界史 A」（第一学習社）でも取り上げられているし（右図），記述も「彼の死後，王国は３つの地域（ほぼ今日のドイツ・フランス・イタリア）に分裂し，」と西ヨーロッパ諸国の起源・基礎となったとしている。西ヨーロッパ世界の特質である「ゲルマン・フランク・ローマ=カトリック」をおさえさせる上でも重要な事項であると思われる。

学習指導要領では東南アジアと同様に「…自然環境，生活，宗教などに着目させながら（世界史 A　２内容⑵ア）…」概観させることになっている。しかし，意外にヨーロッパの国々・地形に対する理解は低い。ヨーロッパだから大丈夫だろうという，こちらの思い込みは大変危険である。生徒にとっては名前を知っていても場所が分からない，都市名と国名を混同するなど，あやふやで混乱を招きやすい地域でもあるようである。他の地域

と比べて情報は多いようで復習プリントの空欄は少ないが,正しい答えを導き出せてはいない。どんな国があるのか，どこにあるのかを，東南アジア同様にしっかりと身につけて，その歴史を理解させたい。

イ　授業展開

（ア）導入＝復習の実施

準備として，他の単元同様に前時の最後にテスト形式（プリント以外机上には何も出さない。何も見ない）で，ヨーロッパの国々を確認させる。昨年学習した内容であることも強調し取り組む意欲を高める。

左側が１年生１０月に学習した内容，右側が今回実施する復習プリントである。プリントはすぐに回収する。回収後，地図帳を使用して確認させる。採点は教員が行う。他の単元と同じで，結果は思わしくない。全体的に正答率は低い（UK はイギリス不可。グレートブリテン及び北アイルランド連合王国が正解)。この状態でフランク王国の分裂やノルマン人の移動を学んだとしても，効果的ではないと思われる。知識を定着させるために，今回も前時の確認・復習プリントで地図帳を使用し，答え合わせを行う。今回も地図帳を利用することで，名前だけ知っている国々に対する生徒の理解を高めることができる。

UK	フランス	ドイツ	ロシア	ウクライナ	ルーマニア
4.2%	32.3%	26.0%	66.7%	6.3%	4.2%

（イ）展開

国名の確認後はヨーロッパへの理解を深め,「西ヨーロッパ諸国の起源」を強く意識させるために，地図を作成させてみる。また学習する内容は次の通り基本的な内容である。

・ヴェルダン，メルセンの位置の確認
・ヴェルダン，メルセンの共通点
　→マース川（ムーズ・ミューズ川）の確認
・ヴェルダン，メルセン両条約の境界線の確認
・現在のフランス，ドイツ，イタリアの再確認

またヴェルダン，メルセンの共通点から，河川の自然的国境について理解させ，ヴェルダン・メルセンの意味を，改めて理解させたい。また発展的な内容としては「ヴェルダンは古くから独仏係争の地（アルザス・ロネーヌ，ヴェルダンの戦い)」,「歌われないドイツ国歌１番ではマース川が国境」や「メルセンは現在のマーストリヒトの北にあり，マーストリヒトでは EU 創設の条約が締結」など現代社会などにつなげることもできる。

（ウ）まとめ

授業後にアンケートを実施し理解を確認し，感想をまとめさせた。その結果は次の通り

である。

<Q　本日の理解：わかったこと、思ったこと>
川が国境をつくるのは覚えていた／西フランク→フランス，東フランク→ドイツ／フランス，ドイツ，イタリアが元は一つの国ということが意外だった／文明の時も川が近くにあり，国境にもなっている／ヴェルダンとメルセンはいろんな意味をもっているんだなと思った／フランス，ドイツ，イタリアの場所とどのように分かれているのかその歴史をふかくしれた／ヨーロッパがどう分裂したかわかった／昔から国境の線に川など山も使っていてすごいと思った。

考査前にプリントを再度確認，出題を連絡する。東南アジアと同様に同じ地図を使用して解答させる。あるクラスの正答率は次のように変化した。正答率は大きく改善している。特に学習内容であるフランスとドイツについては正しく位置を理解できた生徒が多い。アンケート結果にもあるとおり，位置を正しく知り，歴史を知ることが出来たようである。

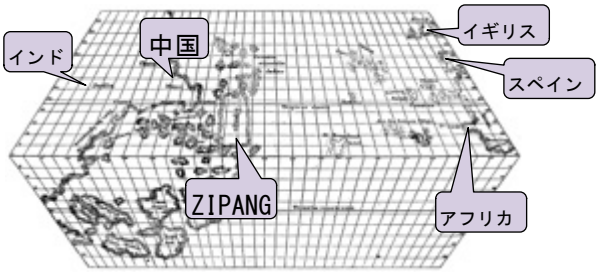
国名	UK	フランス	ドイツ	ロシア	ウクライナ	ルーマニア
復習	6.3%	43.8%	37.5%	71.9%	12.5%	0.0%
考査	47.2%	75.0%	80.6%	88.9%	33.3%	38.9%

（4）コロンブスとアメリカ大陸（平成 25 年度　世界史 B）

ア　学習指導要領と解説

大航海時代の学習には，地球規模・世界全体の地理的な知識が要求されるのは言うまでも無いことと思われる。学習指導要領でも「…ヨーロッパ世界の特質とアメリカ・アフリカとの関係を理解させる（世界史 B　２内容⑷イ）」こととしているが，地理的な知識が重要になる。また学習指導要領解説では「…ヨーロッパ，西アフリカ，アメリカを結ぶ三角貿易が発達したこと，その結果，西ヨーロッパを中心とする大陸間分業体制が確立し，大西洋世界が形成されたこと（世界史 B　２内容とその取扱い⑷イ）」を理解させることになっている。三角貿易，大陸間分業体制を理解する上でも，ヨーロッパ・アフリカ・アメリカの位置関係の把握は欠かせないと考える。アメリカ大陸の位置に関しては，大西洋・太平洋も含めてしっかり理解させたい。世界史を学ぶ上で，4 月に 1 年次の地理の復習をかねて，全大陸を概観するが，それ以来の世界の全体像を必要とする学習内容となる。

イ　授業展開



（ア）導入

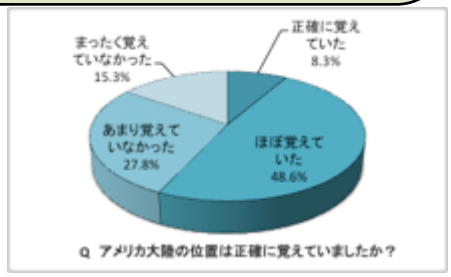
コロンブスのサンサルバドル島到達の前に，「アメリカ大陸の位置」「アメリカ大陸の地形」の知識を確認するためにトスカネリの世界地図を提示（プリント）。黒板には同様の世界地図を掲示する。気になることを確認させると生徒の反応は大きく４つに別れる。

アメリカ大陸に関する正しい認識や知識を有している生徒も存在するが，逆にアメリカ大

陸に関する認識や知識，意識が欠如している生徒も大変多い。

コロンブスがアメリカ大陸の先住民を「インディオ」と呼んだこと，到達地点がインドであったと信じ続けたこと，のちにアメリゴ=ヴェスプッチにより未知の大陸であると証明されたことを理解する上でも，アメリカ大陸の位置と地形は確実に理解させたい。

＜Q　トスカネリの世界地図をみて，気がつくことは何ですか。＞
- アメリカ大陸がない
  …アメリカ大陸に対する認識や知識がある。
- インド，中国がおかしい，四角い
  …目前の情報にのみ意識が集中している。
- おかしいところはない
- わからない

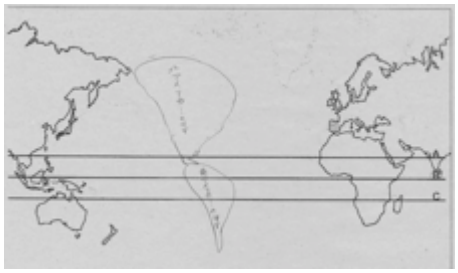


（イ）展開

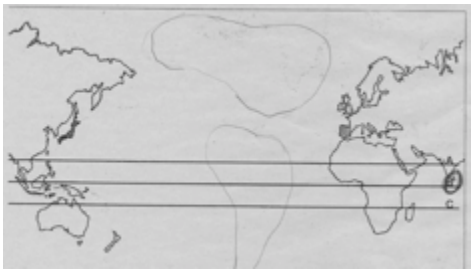
アメリカ大陸の位置と地形の知識を定着させるため教科書･資料集･地図帳を使用せずに完成させてみる。

a　生徒の白地図

【ほぼ正確なもの】



【離れてしまうもの】



過去の学習を活用できる生徒も存在するが，やはり正確な知識を持つ生徒は多くなく，ほとんどの生徒が白紙である。なんとなくぼんやりとした知識をもつ生徒も多く，しっかりとした知識として定着させたい。また「アメリカ大陸がない」と答えた生徒であっても，白地図はまったく描くことが出来ない生徒も存在する。大いなる検討課題であると思う。

b　地図の確認

自分の作成した白地図を，教科書・資料集・地図帳を利用して確認させる。後日実施したアンケートでは，若干ではあるが理解度が深まった様子がうかがえる。

c　スペインの西廻（太平洋）航路

アメリカ大陸の位置と地形を確認し，ヨーロッパやアフリカ大陸との位置関係を把握した後でスペインの西廻（太平洋）航路について，今までの確認を踏まえて学習する。内容としては次の通り基本的な内容である。

- コロンブス
  トスカネリの地球球体説を信じ，西廻りでアジア（インド）を目指して出航（スペインのイサベル女王の援助），サンサルバドル島到達，インドと誤解
- アメリゴ=ヴェスプッチ
  未知の大陸であると発表，アメリカ大陸の呼称
- マゼラン
  アメリカ大陸南端から太平洋に入り，部下が世界周航，地球の球形を証明。

コロンブスが先住民をインディオと呼んでしまった部分では，黒板の地図は全図を示す。多くの生徒が注視し，その理由を理解する生徒も多い。授業の最後に感想として「面白かった」「楽しかった」という反応をわざわざ報告に来る生徒も存在し，知的興味・好奇心を刺激できたのではないかと思われる。

（ウ）まとめ

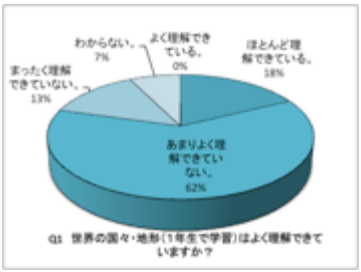
学習が終了した後に,「コロンブスがサンサルバドル島やアメリカ大陸をインドと誤解した理由がわかりましたか」というアンケートを実施した。

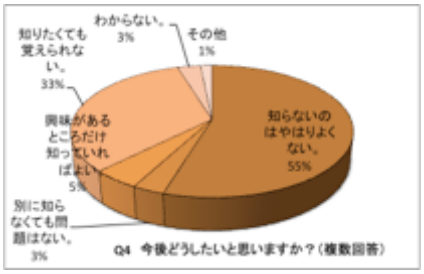
コロンブスはその時アメリカ大陸の存在を知らなかったから誤解した／アメリカ大陸っていうものがあるとは思ってなかったから／ヨーロッパの人々はアメリカ大陸を知らなかったから／インドに行こうと思っていたので着いたところはインドだと思ったから／当時の地図にアメリカ大陸はなかったから／西からいけばインドに着くと思っていたから／わかりにくい／誤解した理由が今ひとつわからない／アメリカ大陸の認識がなかったから。

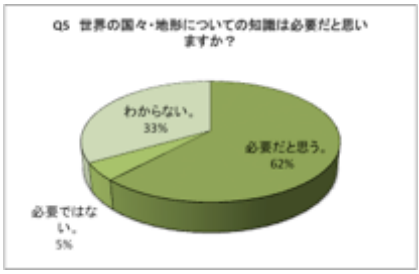
半数の生徒が理解を深めることができたようである。最初はコロンブスを批判的に見ていた生徒も，授業が進み当時の知識や状況がわかるにつれてコロンブスの立場を理解するようになっていった。地図を効果的に活用できたのか，ヨーロッパ・アフリカ・アメリカそしてアジアの位置関係も理解が深まった生徒も多い。

５　成果と課題

（１）　成果







平成 25 年 9 月と平成 26 年 5 月（一部）に，地理の学び直しを含めた世界史の授業を受けている生徒に，昨年度学習した地理の「学び直しの授業」をどれだけ理解しているか調査した。学習した内容は，残念ながら身についていない者が多い。一方で多くの生徒が，知識について不十分だと認識している。その理由の多くは次のようなものである。

土地の名前などを覚えるのが苦手だから／記憶力が乏しいのです／おぼえられない／好きじゃないから／暗記力がないから／覚えようとは思うが覚えられない／プリントばっかりで答えを写しているだけって感じでよく頭に入らなかった。

「覚えようと思うが覚えられない」という言葉は重く，如何にしてこの意欲に答えるべきか大きな問題であると思う。このような意見は少なからずあり，今後の学び直しの授業だけでなく，すべての授業で課題としていきたい。

生徒は，地理的な知識の習得について前向きである。そのためか，世界史での復習でも前向きな姿勢がうかがえる。多くの生徒に基本的なものは抑えておきたいという意欲がうかがえる。

わからないのでやっておかないともっとわからなくなりそうだから／頑張りたいから／わかりたいから／１年生の時の地理の成績はよくなかったので，頑張ろうと思ったから／国や地形の特徴をあまりつかめていないから／覚えたいけどわからないから努力している／でも暗記することがとても苦手でどうしたら良いのかわからない／世界史が苦手で授業内容を理解できるように／世界のことに興味があるから／中学の時は社会が苦手だったので高校は頑張ろうと思ったから／自分のためになるから。

生徒たちは，自分の知識の欠如を認識していること，知識の習得には必要性等を感じて前向きであること，習得のために意欲的に努力しようしていることがうかがえる。生徒たちの現状を踏

まえると，地理的な知識をしっかりと習得させた上で，世界史の授業を進めていくことは必要なことであると思える。

（2）　課題

生徒にとって地理的な知識が不確かなまま授業が進むことは,「どこの地域の歴史なのかわからない」「その地名がどこのことかわからない」状態の「わからない授業」になってしまうのではないかと思われる。しかし，授業実践の結果からは，地理的な知識の確認・復習後では，わずかではあるが「わかった授業」になっていると言えるのではないだろうか。生徒のあやふやな地理的な知識を少しでも確かなものとした上で，世界史の授業を展開することはやはり重要だと思われる。「環境をしらないと歴史を学べない」「去年習った環境とか気候が世界史でも必要だと知って去年の勉強も思い出さないとなと思いました」という生徒の声は，ねらいをしっかりととらえている。「インドや中国から文化が入ってきている国がある」「コロンブスはその時アメリカ大陸の存在を知らなかったから誤解した」など各単元で理解を確かにしている生徒も多い。「わかる授業」はそれだけで楽しいと思うが，多くの生徒が意欲的に臨むその姿は，改めて学力を保障する立場の私達に多くのことを考えさせる。世界史での地理学習についても「学び直しをしてくれるのでとりくみやすい」「やると理解が深まる」と好評である。

しかし，地理的な知識が必要だと思ってはいても，地図帳等を活用し世界史の授業を展開することは，時間的な制約もあることを考えると正直難しい。幸いにして学校としての取組みがあるため，世界史の中での地理の授業はやりやすくはなっているが,「時間的な制約」をどうするかは課題として残る。また「学び直し」を教員間で把握・共有していくこと，それを世界史や他の科目で活用していくための情報交換は必須であるが，そのための「時間的な問題」も課題として残る。だが，時間的な制約や問題が生ずることを覚悟してでも，地理的な内容を世界史の授業にとりいれることは効果があると実感する。

６　おわりに

今回の研究を通して,「世界史を理解するには，地理の知識が不可欠」という長年思い続けてきたことに，一応の答えのようなものが出た。「地理の知識を活用した世界史の授業とはどのようなものか」朧気で茫洋とした状態であったが，研究を進める中で少しではあるが見えてくるものがあった。一年目の実践で生徒の現状を再認識し，同時になんとかしたいという生徒の意欲に対してしっかりと答えていくことの重要さを痛感した。長くなりつつある教員生活の中で改めて，自分自身学ぶところも多かった。地理的な知識の活用だけでなく,「わかる世界史の授業」のために必要なものを，今後も追求していきたい。

最後に，2 年間にわたり，研究に貴重な助言・ご指導をいただいた千葉県教育庁教育振興部指導課ならびに教科指導員の先生方，そして一緒に実践研究に取組み，励まし合い研究を進めた教科研究員の先生方に心から感謝を申し上げます。

＜主な参考文献＞
『基礎学力を問う−２１世紀日本の教育への展望』東京大学学校教育高度化センター編　東京大学出版会 2009 年
『教育フォーラム４９　確かな学力を育てる確かな授業』人間教育研究協議会編　金子書房 2012 年
『地図を書いて学ぶ世界史−世界地図を５秒で書いて考える』千葉県歴史教育者協議会世界部会編　地歴社 2012 年
『歴史的思考力を伸ばす世界史授業デザイン−思考力・判断力・表現力の育て方』福井憲彦・田尻信壹　明治図書 2012 年